実践研究

“Mori style Hybrid Tournament”を組み込んだ大学体育「卓球」授業の実践

森　美喜夫
岐阜聖徳学園大学教育学部 名誉教授

Practical Study of Table Tennis Classes Incorporating “Mori Style Hybrid Tournaments” in University P.E. Education

Mikio MORI

キーワード：試合方式　大学体育　“Mori style Hybrid Tournament”

１．はじめに

筆者は、30年余の間、大学体育「卓球」実技を勤務大学の教員や複数大学の非常勤講師として担当し、筆者なりに修正や工夫を行ってきた。その過程において、授業での試合方式の開発と、教育的配慮などを試行・実践してきた。授業での試合方式は少人数でのリーグ戦（総当たり）が多いが、参加人数が多くなると時間が掛かりすぎる短所があり、緊迫感や刺激の不足ばかりでなく意識改革や価値観変容には不足であろうと考える。一方、トーナメント戦（勝ち上がり）は一度負けるとそこで終わりとなり、授業での試合方式としては適さない。そこで、思いついた・考案したのが、「負けても負けてもトーナメント戦」、つまり、例え何度負けても対戦相手がいなくなるまで続けられるトーナメント戦である。簡略的に表現すれば、一般の大会で行われることが多い３位決定戦を、全ての順位が決定するように、同じ回戦・レベルで負けた者同士で「負けても負けてもトーナメント戦」を繰り返していくと、最終的には全ての順位が決定する。ただし、この運営は多少の煩雑さを伴うため若干の工夫を要するし、更に重要なのが下位やビリになることへの教育的な導き・諭すことが不可欠となる。

ここでは、大学卓球授業で実践してきたプログラムと、その中の変則的なトーナメント（Mori Style Hybrid Tournament, MsHT）の実践例と教育的な配慮および課題について報告する。

Ⅱ．実践してきた「卓球」授業のプログラムと特徴

ここでは、某公立大学での卓球授業を主として報告する。ここの「卓球場」は卓球台６しか置けない狭さと、卓球を選択した約36名の受講生（殆どが１年生）という制約条件があり、また人文学部、芸術工学部、医学部、薬学部、看護学部の各学部生が入り交じった受講生である。この約36名を６班に分け、１班（台）に約６名ずつの配分とし、班での練習や役割分担などを行う。

この授業の計画は、当初の卓球授業時に資料（表１）を配布して説明する。なお、この授業（「健康・スポーツ実技」）全15回のうちの１・２回目は、１．専任教員による全体のガイダンスと種目（テニス、卓球、バドミントン、フットサルなど）の選択・抽選による決定と、２．全体での基礎体力テストが行われ、次からが個別の種目毎の授業（90分）が13回行われる。

この授業での命題は、ライバルといかに戦うかと、そのための努力の価値を問い直すことである。

表１　卓球授業のプログラム

卓球１：班分けと、試合の簡単なルール確認、班での試しの試合（班員の顔と名前を覚えること、併せて授業者は個別や全体のレベル及び雰囲気・課題を推察する）
卓球２：フォア打ちでの返球と、班でのリーグ戦①
卓球３：バック（ショート）での返球、班でのリーグ戦②
卓球４：フォアとバックを交互に連続して返球、班でのリーグ戦③
卓球５：サービスとレシーブの練習（これまでスピードや運動神経で劣っていた者であっても卓球ではボールの回転をうまく活用すれば十分に勝負できるし、簡単に難しい回転もかかることを強調し見本を見せる、順位別のリーグ戦①

卓球６：ツッツキとドライブの練習、順位別のリーグ戦②
卓球７：スマッシュと３球目攻撃（申し合せ有りからそれなしでの攻撃、自分の攻撃戦法をつくる）、順位別のリーグ戦③
卓球８：シングルス　「ハイブリッド　トーナメント」①（シードのとり方と抽選）
卓球９：シングルス　　同　　②
卓球 10：ダブルス　「ハイブリッド　トーナメント」
卓球 11：団体戦　「ハイブリッド　トーナメント」
卓球 12：技術テスト（フォアで往復 30 回返球、次にバックで往復 30 回返球、フォア・バック連続交互で往復 30 回返球ができるまで続ける、相手は主に筆者、時に経験者にも手伝いを依頼することあり、全て完了した者にはできないも者の相手を依頼する。）
卓球 13：同上（前回できなかった技術に挑戦）、終了

このように、概略は、全 13 回のうち、ほぼ毎回試合が組み込まれていることと、また終盤の試合だけの回を除けば毎回、個別の技術練習を「多球練習」「球出し」（球を 30 球連続して出し、それを返す・リターンする。これを３ラウンド、一人当たり計 90 球打つ練習）で行う。球出しは班で相対的に上手な者が担当し、他の４名は球拾い（網での回収）を行い、これらの役割を交代で行う。このために球は各に洗面器に約 100 球ずつ入れておき、全体で 800 球ほど（練習球なので安価）は準備して頂いている。球出し担当者は、球を出す相手のレベルを考慮してピッチやスピードなどを調整する。併せて、ボールが数多く転がることから、踏んづけて潰さないようにすり足で移動するよう促す。

また、通常の生活の場ではエゴは理性でコントロールされねばならないが、試合ではエゴ丸出しでいい。ただし、試合が終わったら、必ず握手をしましょう。試合結果は「試合メモ」（資料１）に記入すること。中学生などの内容とは違う、「大学生として」の記述を期待したいことを告げる。

試合は、はじめの「班別のリーグ戦」で順位を決め、次に「順位別のリーグ戦」で絞り込んだ順位を決め、「ハイブリッド　トーナメント (MsHT)」で順位別・１位リーグの６人を第１から第６シードとし、同２位リーグの１位と２位を順に第７シードと第８シードとする。また、他の者は後に、抽選で入る場所を決める。

試合に際しては、次のような問答も行う。

Ques1.　６人でリーグ戦・総当たりを行うと、計何試合になりますか？

Ans.　意外と間違える、または答えられない学生が文系では少なくない。理系では簡単すぎるよう。説明できる学生に、次のような主旨を説明願う。６人が５試合ずつ行うが、ab も ba も同一の試合なので全試合の２分の１となり、（５試合×６人）÷２＝15 試合となる。公式は、n(n-1) ÷２となる。授業者からは、ここでの試合は待ち時間短縮が必要なため、通常・正式とは異なり、11 本先取の２ゲーム（ジュースなし）とし、1 対１となったら３ゲーム目は３本先取した方の勝ちとすること、得点カードは必ず用いること、そしてリーグ戦時の審判は特定の者に偏らないようにすることなどを要求する。

次の補足も行う。この方式での試合だと１試合の所要時間は約５分であり、交代等の時間を短くして行えば、６人でのリーグ戦は、約５分× 15 試合で 75 分プラスαとなり、時間が逼迫するため、試合の間を短縮するように、卓球台を空ける時間をなくすよう協力し合うこと。

Ⅲ．ハイブリッド　トーナメント（MsHT）の方式と教育的意図および課題

１．ハイブリッド　トーナメント（MsHT）の方式と教育的意図

これは、一般的なトーナメントの一度負けたら終わるという短所を補うべく、授業向けのトーナメントとして試行・開発してきた方式である。参加者全員が勝ち負けに関係なく、何試合もできることや、先述のように同じ回戦やレベルで負けた者同士の試合を、対戦相手がいなくなるまでできることである。

最終的には、最後の対戦相手が、その者の「ライバル・同じようなレベル」となる。その相手といかに戦うのか、準備・練習をするのかとなり、ここでの技術的・戦術的目標はそこにある。単なる順位が上であればいいとか、下であれば価値がないというものではない。一般の選手などとは異なり、自分の長所・短所を踏まえ、ライバルといかに戦い得たのか、どんな教訓や課題が発見できたのかが重要となる。

授業では、次のような趣旨であることを伝える。小中学生では、スポーツや勉強ができて、かっこい

い者をよしとするような価値観は少なくなかろう。そこには、プロセスとしての努力などの価値は不問にされたり、結果としてのパフォーマンスに関心が偏りがちなためではなかろうか。同じパフォーマンス・レベルに到達するのに、人によって何倍もの努力などを要する。ましてや、ここでの卓球で一番になったとしても、プロや強い選手が集まる試合・大会では相手にもならない。成熟した価値、例えここでビリになっても、ライバルと戦うための努力どれほどできたか、併せてそこで得られたことの価値は順位ではないはずである。ただし、こうような価値観の変容は簡単ではなかろうが、より多くの学生にその一助として欲しい。「自分」を知ることとも無関係ではない。

シードの定義や一般的なとり方について、受講生との問答を次のような手順で行う。

Q1. トーナメント戦でのシードとは、どういうことですか？

Ans. １回戦が免除されることとの誤答が多い。

授業者から、強い者同士が早い回戦で対戦しないようになど、強い者は始めのうちは弱い者と対戦できる等の特権が与えられること。更に、「強い者・弱い者」の「操作的な定義（大学では頻繁に使われる用語であるため慣れるようにして欲しい旨を加える)」は、本当に強いか弱いかは試合をしてみないと分からないので、ここでは班別と順位別の二度のリーグ戦を経て上位の８人を順にシードする。

一般の大会などでは前回大会の実績やランキングでシードを決定する。

Q2. シードの一般的なとり方を、16 人を例として、考えさせる。トーナメント図をホワイト ボードに１～16 を順にナンバーリング・板書し、第１から第８シードまでの順に、問答を繰り返しながら確認し、ここにどのような合理性・整合性と法則性があるかを考えさせ、質問する。挙手した者に説明願う。

図１-1 を用いて説明すると、次のような内容である。

全体を、まず２分割し、次に各々を２分割し、４つのブロックをできるだけ均等な人数にする。その１番始め（1）に第１シードを、最後の番号（35）に第２シードを置く。つまり、一番強い者と二番目に強い者はその「操作定義」通りに勝ち上がれば最後の対戦となる。

これから先は、いろんな説明が可能であるが、より上位の者の立場から説明する。

第３シードと第４シードについて、第１シードは第３シードより弱い第４シードとの対戦が対戦することが合理性があるし、逆に第２シードは第３シードとの対戦となる。ここでは合計数が第１と第４、第２と第３の何れの合計も「５」となること。

第５シードと第６シードも、第３シードは弱い方の第６シードと、第４シードは両者での比較では強い方の第 5 シードでの対戦となる。

同様に、第７シードは第２シードと、第８シードは第１シードとの対戦となる。ここでも合計数が第１と第８、第２と第７、第３と第６、第４と第５で、すべて「９」となる。つまり、これ以降も、シードをとる数に１を足した数が合計になるようにすれば合理性などが担保されることとなる。

このようにシードをとる数によって合計数は常に同じになるようにしていけばシードのとり方(seeding) は簡単であるし、生涯スポーツなどにおいても、知っておけば役立つことも少なくなかろう。一般の学生においては、試合・大会に参加経験はあっても、シードのとり方やからくりについては不確かなままなことがあろうと思える。

図１－１と図１－２をもとにこの方式と運営・進行を解説する。

このトーナメントの運営について、いくつかの指示を出す。１）基本は敗者審判とするが、卓球台を空けないために試合のコールがあった場合、審判をやめて試合の台へ行くこと。空いた審判は、手の空いている人に依頼する。２）試合が終わったら、勝者が速やかに報告に来ること。３）もし、コールされない時間が長いと思ったら、本部（ホワイトボード前）に確認に来て欲しいこと。とりわけ、１・２回戦敗退組はやや煩雑になるため、気をつけていて欲しい。4）欠席者の確認。

一般のトーナメントだと参加数（ｎ）－１、ここの 35 名だと 34 試合となる。ところが、このハイブリッド　トーナメントの場合、１・２回戦敗退組だけでも、19 名で 18 試合、再度の１・２回戦敗退組 11 名で 10 試合、再再度の１・２回戦敗退組７名で６試合、再再再度の１・２回戦敗退組４名で３試合、そこに最終順位決定戦が３試合加わるので、計 52 試合となる。３回戦敗退組は計 12 試合、５～８位決

定戦は計４試合、３・４位決定戦が１試合となり、総計で 100 試合を超え、多くは３試合以上でき、時間的にも６台を空くことなく試合をいれれば、ギリギリで 90 分２回の授業時間で消化できる。卓球台を 10 台置ける広さがあると、もっとゆとりをもって運営できるが、仕方がない。

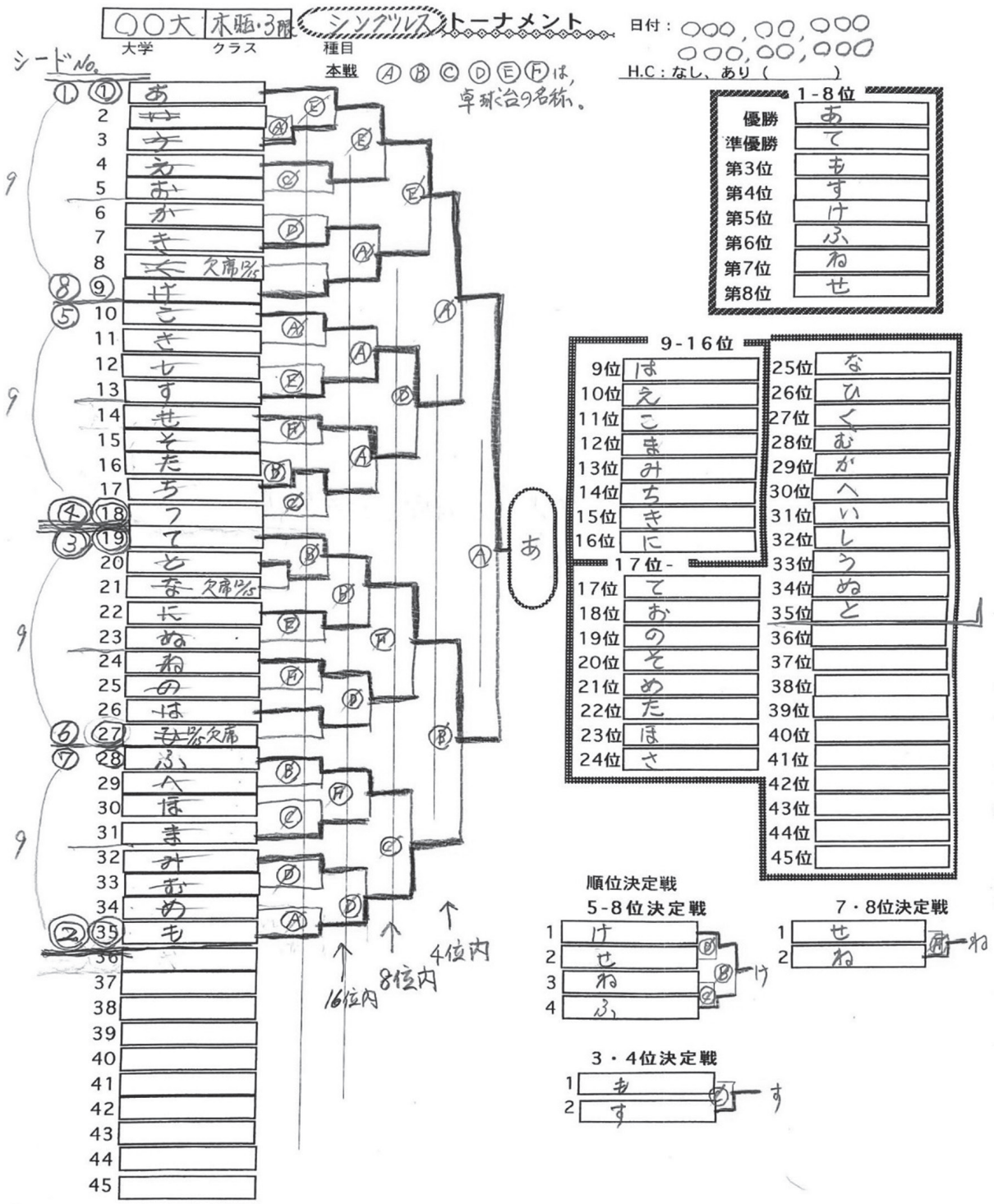

図１－１　ハイブリッド　トーナメントの実践例（全体と８位以上）

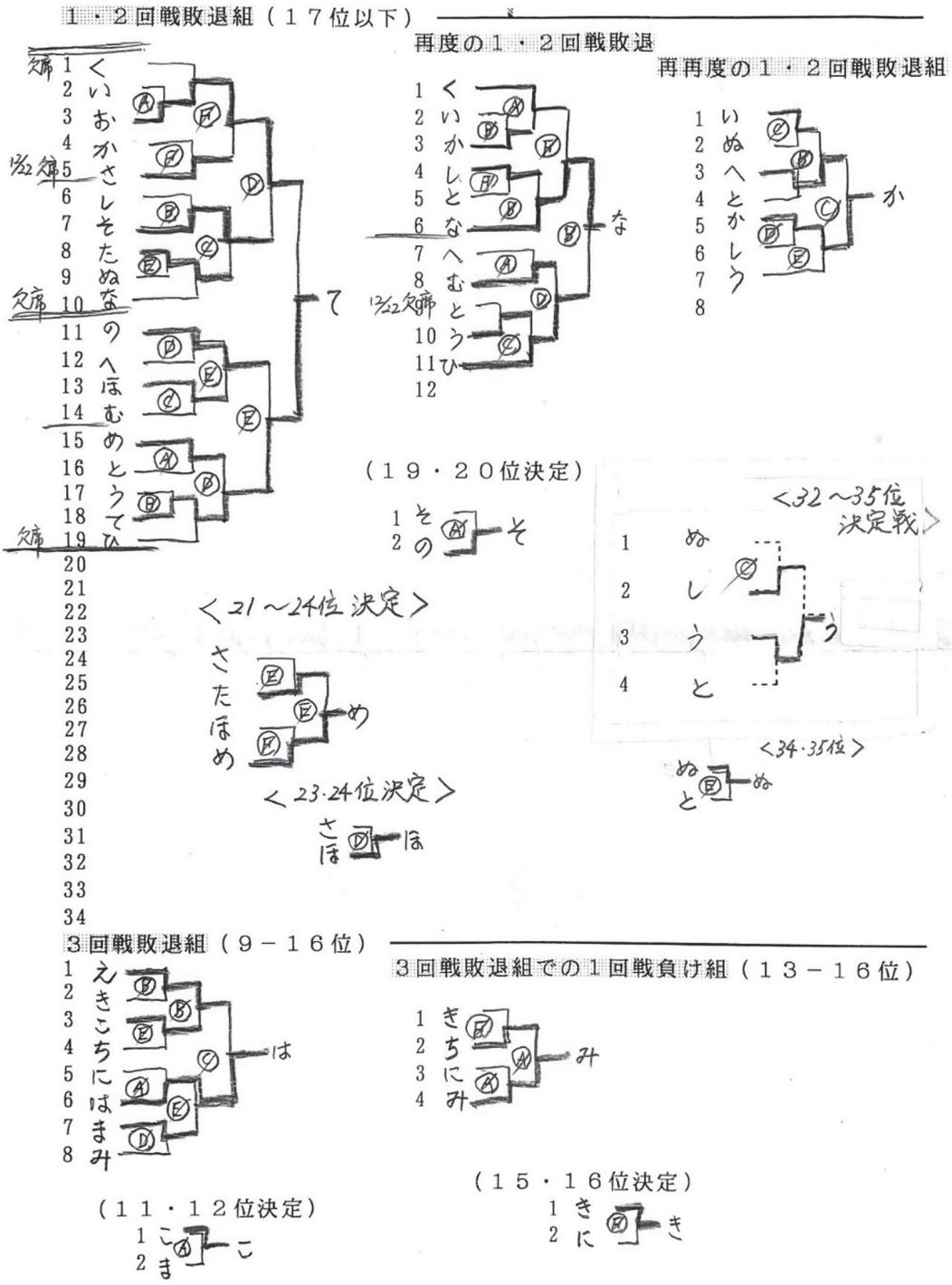

図1－2　ハイブリッド　トーナメント（MsHT）の実践例（3回戦負け以下のトーナメント）

2．課題

何よりも、下位になった学生がこのトーナメントの意図（intention）を理解や肯定してくれているか気になるところである。授業者としても慌ただしい運営のなかで観察や話しかけなどしてきたが、本当の心情が分からないこともある。ある同僚の体育教員から、体育嫌いに関する自由記述調査への詳細な心情が記述された回答内容を見せてもらった際に、その深刻さと自分の行動を振り返り、深刻に受け

止めねばと反省させられたし、多くの体育教師にも当てはまるのではなかろうかとも思えた。運動が苦手の学生について理解しにくいのは、運動が得意で好きな者が多い体育教師であろうからである。

ただし、試合メモ（表１）や授業中の行動などから、表１のような負け続けても努力や工夫を続けている学生もおり、少しは救われる思いである。

表１　試合メモの例（35 人中 34 位の学生）

卓球の試合メモ　　学籍番号（　　）　氏名（　　）

期日（曜）	試合名	対戦相手名	結果	反省（技術面、戦法面）
10/20（木）	3年リーグ Ⓢ W T	中根	4－11 4 11 勝(敗)	バックの角度が上を向いていて ボールがコートの中に入らない。フォアは空振ることがあるので、しっかりボールを見たい。
10/27（木）	3年リーグ Ⓢ W T	皆川	2－11 2 11 勝(敗)	前回と同じで バックの角度が悪かった。だけど 前回とちがい、とれた2点は自分の攻撃が決まったので つづけていきたい。
10/27（木）	3年リーグ Ⓢ W T	森	4－11 0 11 勝(敗)	コートの中に ボールが入らない。フォアの勢いが 強すぎる。点をとれるように 安定にいきたい。
10/27（木）	3年リーグ Ⓢ W T	中島	2－11 1 11 勝(敗)	縦こうラリーが続いて いいところまでいくのに 焦って 次にコートに入らない。決めにいきすぎないように 続けるだけにしたい。
11/10（木）	3年リーグ Ⓢ W T	田中	6－11 2 11 勝(敗)	2週間やっていなかったら 卓球ができなくなっていた。球を返すことに精一杯で コントロールできない。甘い球を返したら スマッシュを決められたので 気をつけたい。
11/17（木）	順位リーグ Ⓢ W T	山田	2－11 6 11 勝(敗)	コートに入らなかった。後半はなんとなく慣れてきて、点が取れるようになったが 自分のミスが目立った。まずはコートに入れる。
11/17（木）	順位リーグ Ⓢ W T	大和	2－11 1 3 勝(敗)	初めて 1セットとれた！ 自分のフォアが使いものになってきたが、自分のミスとの決定、が多い。確実に点をとりたいな。
11/24（木）	順位リーグ Ⓢ W T	神戸	6－11 2 11 勝(敗)	相手のサーブが とても すばらしかった。自分も回転サーブをしてみたが、返された後の対応が できなかった。
11/24（木）	順位リーグ Ⓢ W T	竹市	11－7 6 11 2 3 勝(敗)	自分のサーブが 相手に効いていた。最後は 自分のミスで 負けてしまった。サーブの後の返球をおちついてできた。
12/1（木）	順位リーグ Ⓢ W T	南谷	7－11 勝(敗)	サーブの後の返球ができなかった。自分で かけた回転に ひっかかった。回転と ちがうサーブとを 使い分けたい。

備考：

Ⅴ．要約

本報告では、大学体育「卓球」授業での変則的なトーナメント（“Mori style Hybrid Tournament”）の方式と教育的な意図および配慮などについて述べた。

一般的なトーナメントの一度負けたら終わるという短所を補うべく、またトーナメントの参加者全員が勝ち負けに関係なく、何試合もできることや、同じ回戦やレベルで負けた者同士の試合を続けていくと、全ての順位が決定する。最終的には、最後の対戦相手が、その者の「ライバル･同じようなレベル」となる。その相手といかに戦うのか、準備・練習をするのかとなる。併せて、下位の者の心情への配慮は重要であるが、行動観察などしかできなかったことは課題として残った。